

王太子殿下の真実の愛の
お相手は、私の好きな
幼馴染の獣人騎士でした!?



季邑えり

Eri
Kimura

目次

王太子殿下の真実の愛のお相手は、
私の好きな幼馴染の獣人騎士でした!?

書き下ろし番外編

子どもたちと一緒にの休日

王太子殿下の真実の愛のお相手は、
私の好きな幼馴染の獣人騎士でした!?

プロローグ

何本ものかがり火が焚かれた宮殿の入口は、まばゆいほどの光に包まれている。

今夜は新年を祝う王家主催の宮廷舞踏会とあり、名だたる貴族が国中から集まっていた。

アメリカにとっては成人となつて初めての舞踏会で、兄のクリフォードにエスコートしてもらい参加している。黄金のウェーブする髪をハーフアップにまとめ、髪と同じ色に光る髪飾りをつけていた。

空色の瞳はアメリカの浮き足立つところを表して輝きを増している。

裾がふわりと広がった淡いページュのドレスには、ビジュウが幾重にもつけられていた。

首と肩を露出して、低い背のわりには大きめの胸の谷間が現れたデザインの夜会服は、普段のものよりも豪華に仕立てられている。

新年のお祝いというだけではない。アメリカがこれから参加する舞踏会には長年想いを寄せる騎士がいて、父親からは「彼から大切な話」があるだろうと言われていた。

幼馴染のジャスティン・ルーセル。

彼は優秀な成績で騎士学校を卒業し、今は王太子付きの近衛騎士として宮廷騎士団に入っている。

今夜のジャスティンはいつも着ている紺の騎士服ではなく、白の布地に銀糸で飾り刺繍のされた夜会用の豪華な騎士服をまとっていた。

ジャスティンは光を受けるとプラチナのように輝く青銀の髪に、まっすぐ通った鼻梁に固く引き締まった唇を持つ美丈夫だ。

彼の目に留まりたい、とジャスティンを狙う令嬢はたくさんいる。

なぜなら彼は容姿だけでなく身体能力の優れた獣人騎士でもあった。

——獣人、それは動物の特徴を持つ人間で、セリーナ王国では貴重な人材として重用されている。姿は人間と変わらないが知力も体力も容姿も良い者が多い。

ジャスティンも獣人の能力を生かし、騎士として身を立てていた。

ナサナエル・タヴァナー王太子を守る騎士として、ジャスティンは夜会であっても厳しい表情を崩すことはない。

どれだけ着飾った美しい女性が傍に寄ってこようと眉一つ動かすこともなかった。
 深紅の髪を持ち、炎のごとく苛烈なイメージのナサナエル王太子と、その隣に立つ近衛は『炎の王子と氷の騎士』と呼ばれ、存在感を増していた。

（あ、ジャスティン。今日もすごく素敵……）

ナサナエル王太子の出席する夜会に参加すれば、ジャスティンの姿を一目でも見ることもができる。それが今のアメリカにできる唯一のことだった。

アメリカは内気な性格もあって、夜会では自分から誰かに話しかけることができない。奥ゆかしい、といえば聞こえはいいが、仲のいい令嬢もほとんどいない。

兄が傍を離れた途端に一人となり、いつも壁の花となってしまう。

そんな彼女に声をかける男性もいるが、不思議なことに一度話をした後に再度声をかけてくる者はいなかった。

しかも、時折ジャスティンと視線が絡んだ途端に顔を伏せられる。

明らかに避けられている仕草にアメリカは毎回傷ついてしまうのに、それでもジャスティンの姿が見たい。

（お父様はジャスティンから私に話があると言っていたけど……、やっぱり何もないわよね）

ジャスティンは鋭い眼をして王太子を守るために背後に控えている。

舞踏会の時間は瞬く間に過ぎ、あとは王族からの新年の挨拶を残すだけとなった。

王族が壇上に上ると会場にいる人々が集まり始める。

ナサナエルは一步前に出て大きな声を出した。

「キャサリン・オルコット、お前とはもう婚約破棄だ！」

煌びやかな王宮で開かれた新年を祝う夜会の挨拶とは思えない、王太子の宣言が響き渡る。

ざわついていた会場は彼のひとことで水を打ったようにシーンと静まり返った。

急に婚約破棄を宣言したナサナエルに人々の注目が集まる。

（な、なんてこと！）

アメリカも何事かと目を見張った。

騒動の中、ナサナエルの目の前にいた婚約者のオルコット公爵令嬢が、顔を青白くして彼に問いかけた。

「ナサナエル殿下！ 私との婚約を破棄するのはなぜですか？」

「それは、……それは、私は真実の愛を見つけたのだ！」

ナサナエルは顔を紅潮させ、会場に響き渡るように声を張り上げた。

「真実の愛とは、……お相手はどなたですか？」

オルコット公爵令嬢はとうとう涙を一筋流して、それでも気丈に顔を上げる。するとナサナエルは、緊張した様子で声を震わせながら答えた。

「そ、それは……、か、彼だ！ 彼が私の真実の愛なのだ！」

周囲が一気に騒然とし始める。

なぜなら、ナサナエルの指さした相手は、隣に立っているのは――

（ジャスティン！）

声にならない叫び声を上げたアメリカは、口をはくはくとさせた。

「そんな！」

「まさか！」

「きゃあああ！」

王太子は婚約破棄を言い渡すだけでなく、真実の愛の相手が近衛騎士のジャスティンだと表明した。

ナサナエルもジャスティンも、優れた男らしい体躯と整った顔立ちのため、多くの令嬢の憧れの存在だ。

その二人が恋人同士だと宣言したせいで、あちこちで悲鳴が上がる。

いくら男色に理解のあるセリーナ王国とはいえ、世継ぎを期待される王太子の恋人が男性とあっては王位の継承問題にもなりかねない。

その場にいる貴族の中には、今後の政権を心配して顔色を悪くする者もいた。

「ジャスティン……、そんな！」

アメリカがジャスティンを目で追うと、彼はナサナエルの隣で眉をひそめ、口を固く結び、まるで怒っているようだ。

もしかすると、今日この場で恋人関係を明かされるとは思っていなかったのかもしれない。

泣き崩れるオルコット公爵令嬢は、つき従っていたシャペロン（介添えの女性）に肩を抱かれ、静かに退室した。

（婚約破棄をするといつても、何もこんな目立つ夜会でなくても……、キャサリン様もかわいそうに）

特にこれまで、ナサナエルとキャサリンが不仲だという話はなかった。

むしろ最近では仲睦まじい姿が見られ、結婚式の発表も遠くないという噂がうわさあったくらいだ。

アメリカはキャサリン嬢の心中を思うといたたまれなくなる。
もし自分がキャサリン嬢の立場だったら、立ち直ることなどできそうにない。
その場に残っていたナサナエルもしばらく父親である王と話をしていたが、踵を返す
とジャスティンを連れて未だ収まりのつかない大広間を出ていった。

「皆の者、静かに――」

ナサナエルが退場したのを見届けると、王は両手を上げ聴衆に静まるように命令した。
さらに、ナサナエルの宣言した内容については、後日改めて発表するとだけ伝えられ、
その日の舞踏会はあっけなく終了した。

「まさか、ジャスティンが男色家だったなんて」

アメリカは大広間からバルコニーに出ると、手すりにもたれながら切なくため息を漏
らした。

簡単には信じられないけれど、ジャスティンが男色家だとすればこれまでの行動に納
得がいく。

彼とナサナエルは同じ学年で、一緒に切磋琢磨した間柄で仲がいい。

そのためジャスティンがナサナエルの近衛騎士に選ばれたとも聞いた。

騎士学校には女性もいるが、その数は非常に少ない。

一部の男子学生は男色に目覚めることもあるという。

ジャスティンもその仲間入りをしたため、アメリカに興味を失ったのかもしれない。

彼は今や、獣人騎士として宮廷騎士団の中でも若手エースだ。王太子からの信頼も厚い。

「……ジャスティン、あなたが殿下の恋人だったなんて」

もうあの時の約束を忘れて、幼い頃からの恋に終止符を打つべき時がきたのかもしれ
ない。

――彼は、ナサナエル殿下の恋人なのだから。

頬を伝う涙を拭い、アメリカは気持ちを切り替えようとバルコニーから外に出た。

手入れの十分された庭園には、木々の間を縫うように小道が整えられている。

夜の冷たい空気を吸うと、さっきまで哀しみで埋め尽くされていたところが静まり、
気持ちも落ち着いてくる。

月が綺麗に出ていて、王宮の切りそろえられた木々の庭を美しく照らしていた。

少し歩くと、噴水の近くで誰かが言い争っている声が聞こえる。

どうやら男性同士が口喧嘩をしているようだ。

「……！」

「……、お前しかいないんだ！ ……！」

「殿下！ ……、……………」
二人は声を抑えて争っている。注意して聞くと二人は騒動の中心にいたナサナエルだった。

もう一人は背中しか見えないが、服装からして……

（ジャステイン！）

アメリカは近くにあった木の陰にサッと入り、二人をそーっと観察した。

月はナサナエルの顔を照らしている。苛烈なイメーজのあるあの王太子とは思えないほど眉を寄せて、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

二人は急に静かになった。

そしてナサナエルが下を向いたタイミングで、ジャステインが彼の頬を両手で挟み込み、顔を近づけた。

まるでそれは——キスをしているかのようだ。

（ジャステイン、あなたは本当に……………！）

アメリカはところの中で何かがバリリンと割れた音が聞こえ——、幼い頃から温めてきた初恋が終わったことを知った。

もしかしたら、ナサナエルはジャステインと一芝居打ったのではないかと疑っていた。でも今見た二人の様子からはそうとは思えない。

ナサナエルは涙目になりながらジャステインを見上げ、恋人を一途に想うような顔をしていた。

（ああ、ジャステインは本当に殿下の恋人なのね）

二人の親密な様子は、恋人同士であることを信じさせるのに十分だった。

赤髪を立てて、獅子と間違ひそうなほど勇猛な姿をしているナサナエル王太子。

盗賊討伐に向かった時はまるで炎のように苛烈で、その傍に常に控えていたジャステインは氷のごとく冷静に彼を支えていたという。

きっと、その頃から二人の仲は進展していたのだろう。

ズキン、と痛む胸を押さえアメリカはその場をそっと離れる。

（さようなら、ジャステイン——、私の初恋の騎士様）

嗚咽を嘔み殺しながら、アメリカは兄の待つ馬車乗り場へと向かった。

第一章

ジャスティンと初めて出会ったのは、アメリカが五歳になる誕生祝いの時だった。心地よい風が吹き抜ける日に伯爵邸の庭園で開催されたパーティーに、近隣に住むルーセル伯爵一家も招かれた。

ルーセル家の息子で七歳になるジャスティンは鈍く光る刃のような銀色の髪を持ち、同年齢のどの子よりも背が高く体格も良い。アメリカを一目見た彼は目を大きく見開いた。

「っ、君はっ……!」

ジャスティンは息を止めて一瞬動かなくなり、金色の瞳を輝かせてアメリカを見つめたまま、肩を小刻みに震わせて喜びを囁みしめている。

ふわふわとした金色の髪を風に遊ばせて、空色の瞳と同じ色のドレスを着たアメリカは、自分を見つめるジャスティンの金色の瞳が珍しくて、その輝きを覗き込んでいた。黙ったまま見つめ合う二人を見たアメリカの母は、小腰を屈めて娘の肩を叩いた。

「アメリカ、お客様よ。ほら、ご挨拶して」

「は、はい。アメリカ・ステイングレーです。はじめまして」

にこりと微笑みながらスカートの端をちよつと持ち上げて、練習したばかりの淑女の礼をする。

ジャスティンはアメリカから視線を外すことなく、こころの底から嬉しいとばかりに屈託のない笑顔を見せると、膝を深く曲げて目の高さをアメリカと合わせた。

「ジャスティン・ルーセルです」

少年特有の高く澄んだ声を聞いて、アメリカは何かがふわりとこころを通り抜けるのを感じた。

その日からジャスティンはアメリカの一番の友達で、かけがえのない幼馴染となった。

アメリカの初恋は自然にやってきた。

初めて会った時からずっと、ジャスティンは甘く蕩ける眼差しでアメリカを見つめている。

親同士はすぐに仲良くなり屋敷も近くにあった。

さらに兄のクリフォードとジャスティンは同い年で、その二歳下のアメリカの三人は

毎日、飽きもしないで日が暮れるまで一緒に遊んだ。

獣人のジャスティンは嗅覚が優れていて、香りのよい花をたくさん集めることができる。

アメリカが色鮮やかな花が好きを知ると、空いた時間に広大な野山を駆けては花を摘み、それを渡した。

「アメリカ——！ こっちにおいで、いい匂いのする花があるよ！」

「ジャスティン、どれ？」

「これ、この花だけわかる？」

「これ？」

「うん。でもやっぱりアメリカが一番、いい匂いがする！」

「もう！ ジャスティンはそればかり！」

ちよつと年上のお兄さんで、面倒見のいい彼はいつでもアメリカの近くにいた。

庭を歩く時は手を繋ぎ、足が痛くなるとおんぶしてくれる。

時折、自分の匂いを嗅ぐ仕草するのは彼が獣人だからと思い、アメリカは気にすることなくいつも一緒にいた。

おやつ時間も隣に座ってアメリカに食べさせていたのはジャスティンだった。

「アメリカ、はい、クッキーだよ。あーんして」

「ん、あーん」

焼き菓子やプリン、なんでも彼の手で食べさせてもらうのが習慣になっている。

その様子を隣で見ていたクリフォードが口を挟んだ。

「おい、ジャスティン、アメリカはもう自分で食べることができる年齢だぞ」

「クリフォード、いいんだよ。僕が食べさせたいんだから」

「そうよ、お兄様。ジャスティンが食べさせると、美味しいお菓子がもつと、もーつと美味しくなるんだから！」

兄が呆れるほどの可愛がりようを、アメリカは何も不思議に思っていなかった。

むしろジャスティンと家が違うことが残念で、クリフォードと交代してほしいとねだったこともある。

遊び疲れたアメリカのお昼寝の時間に、寝かしつけるのも自然とジャスティンの役目になった。

「ねえねえ、ジャスティン。もふもふさせて？」

「ちよつとだけだよ」

お昼寝部屋でアメリカがお願いをすると、ジャスティンは後ろを向いて服を脱ぎ、獣

化した姿を見せた。

狼獣人のジャスティンは美しい青銀の毛をなびかせる狼に姿を変えることができる。そのことを知ったアメリカは、二人きりになると時々ジャスティンに狼になってほしいとせがみ、彼も大抵の場合はそれに応えていた。

獣人が獣化した姿を見せるのは家族か、親しい間柄の者、例えば結婚を約束した者だけだということを当時のアメリカは知らなかった。

普段の優しい瞳と違い、鋭く金の瞳を光らせた彼は、ベッドに寝るアメリカの傍に来て、その身を横たえた。

「もふもふして、気持ちいい！」

獣化した狼のジャスティンを撫でていると、不思議なことにスーッと眠気がくる。

普段は寝つきの悪いアメリカだったが、優しい狼を抱きしめながらその毛に顔を埋めると気持ちが落ち着いていた。

「ジャスティンは、太陽の匂いがするね」

「ワオン」

狼になったジャスティンは言葉を話せないが、鳴き声で喜んでいることがわかる。

アメリカは狼に添い寝してもらうと、すぐに眠ることができた。

狼になったまま、ジャスティンも一緒に昼寝することさえあった。

アメリカが本を読める年齢になった頃、二人で庭にある東屋あずまやに行き本を読むことが多くなった。

「ねえねえ、ジャスティンは狼なんだよね？」

「うん、狼と人間が重なっているよ」

「すごい、強いんだよって、兄様が言っていたわ」

屈託なく笑うアメリカは、今日は新しく手に入った騎士の物語の本を持っている。

「父さんは獣人騎士で、とても強かったよ」

「騎士？ お話の中によく出てくる強い騎士だったの？」

アメリカは先日読んだ本の中に、お姫様のため騎士が悪者を倒した話があるのを思い出した。

「お話の中の騎士より、うんと強いよ」

「すごい！ ジャスティンも強いなら、大きくなったら騎士になるの？」

「アメリカは、……僕に騎士になってほしい？」

「うん！ だってジャスティンが騎士なら、私をお姫様として守ってくれるでしょ？」

花がほろんだように笑うアメリカを、ジャスティンは目を細めて見つめている。どんなに突拍子もないことを言っても、彼は否定しないで受け止めてくれる大切な友達だ。

アメリカは持っていた本を横に置くとジャスティンの頬を両手で持ち、いきなり顔を近づけて鼻と鼻をこつんと合わせた。

「んん？ アメリカ？」

いきなり鼻をこすられることになったジャスティンは、目を丸くした。

「あのね、ご本の中に書いてあったわ。狼の騎士は遊びたくなると鼻をお姫様のお鼻に合わせて、仲良くするんですって！ どう？ ジャスティンも遊びたくなった？」

「ア、アメリカ？」

無邪気な様子で顔を近づけるアメリカに、ジャスティンは慌ててこつんと額をくつつけた。

「アメリカ、鼻をくつつけるのは違う意味もあるから、僕以外の男にしちゃダメだよ」

「え？ うん、わかった。ジャスティン、もしかして怒ってるの？」

「違う、……うーんと、心配してるだけ」

アメリカの空色の瞳を覗き込む金色の瞳がほのかに揺れている。

いつも隣にいる兄みたいな存在のジャスティンがまるで違う生き物のように感じ、トクン、とアメリカの胸が鳴った。

「ジャスティンにしか、しないから」

「うん、約束だよ。僕もアメリカにしかない」

顔を離れたジャスティンは、静かに手元の本を開いて再び読み始めた。

アメリカも横に置いた本を持って開いてみるけれど、文字が頭に入っていない。

ドクドクと高鳴る鼓動ばかりが耳に響き、集中できなかった。

肩がくつくほど隣に座っているジャスティンの横顔を見上げると、幼心おこころにも彼の顔の造作が整っていることがわかる。

（ジャスティンの隣に、大人になっても座っていたいな）

アメリカはジャスティンが兄とも、友達とも違う存在だということに気がついた。それが初恋だと気がつくのに時間はかからなかった。

兄弟のいないジャスティンは、ステイングレー伯爵家でクリフォードと一緒に家庭教師から学んでいた。

自然とアメリカも学び始めるが兄たちに追いつけない。

家庭教師の時間が終わるとジャスティンはいつでも、教師よりわかりやすくアメリカに勉強を教えてくれた。

「ねえ、ジャスティン、先生はどうしてあんなに難しく教えるの？」

「そうだね、アメリカにはまだ早いのかな」

「ジャスティンが先生だったら、よかったのに」

「でも、先生だと一緒に遊べなくなっちゃうよ」

「それは嫌！」

「そうだね、僕もアメリカと一緒にいたいから、もうちょっとだけ頑張ろうか」

「うん！」

ジャスティンは小さなアメリカを膝の上に乗せて頭を撫でる。

時折、アメリカの匂いを嗅ぐために密着するがアメリカは嫌ではなかった。

むしろ、ジャスティンの身体の温もりを感じることで心地良い。

気がつくとすぐ傍にジャスティンがいて、アメリカは実の兄であるクリフォードよりも彼と過ごす時間のほうが多かった。

ある日アメリカは人形と小さな家のおもちゃで遊びながら、無邪気な声でさらりと

言った。

「私、将来はジャスティンのお嫁さんになって、赤い屋根のおうちに住むの！」

「赤い屋根のおうち？」

手にしているおもちゃの家の屋根は、赤くて可愛らしい造りをしていた。

二階建ての平民が好んで住む家だ。

「そう、丘の上にあつて、小さくてかわいいおうちな。ジャスティンのお嫁さんになったら、毎日一緒に眠ることができるでしょ？」

「う、うん。それはそうだけど」

「じゃ、毎日ジャスティンのもふもふと一緒に寝ね！」

「えーっ、そうすると僕は狼になって寝るの？」

「うん！ ジャスティンが狼になって、私はいっぱい、抱きしめて寝るの！」

「じゃ、狼になるから、アメリカは僕のお嫁さんになってくれる？」

「いいよ！」

ジャスティンは目を細めて、アメリカを可愛がった。

二人は幼いなりにも特別な絆を感じて過ごしたけれど、そんな幸せな時はあっけなく終わりを告げることになる。

ジャスティンが騎士学校に、クリフォードが貴族の子弟の通う学園に入るために王都へ行くと、二人の関係は急激に変化した。それもアメリカが望まぬ方向に。

ジャスティンは休暇時期になっても領地に戻ることもなく、ステイングレー家への訪問はバツタリと途絶えてしまう。

「ねえ、お父様、お母様。兄様は頻繁に帰ってくるのに、どうしてジャスティンは帰ってこないの？」

「さあ、騎士学校は忙しいのではないのかな」

「でも、もう半年も会っていないよ」

いくらジャスティンのことを話題にしても、父親も母親も、クリフォードさえも何も言わない。

そうしているうちに、アメリカの十二歳の誕生日がやってきた。

身内でお祝いするだけの小さな誕生会は、ジャスティンと出会った七年前と同じだ。

その日も水色のドレスを着たアメリカが呼ばれて振り返ると、花がいっぱい飾られたガーデンパーティーの会場に現れたのは、青色のフロックコートを着たジャスティンだった。

肩についていた青銀の髪を短く切り、幼さの消え去った彼はまるで絵本の中から飛び出してきた王子様のようにだ。

「——っ、ジャスティン！」

久しぶりに会う彼は背が伸びて声が少し低くなっていたが、アメリカを見る目は変わらず甘く蕩けるようだ。

腕にはカラフルな花束のほかに箱を一つ持っていた。

「アメリカ、これ。君の誕生日プレゼントだけど、受け取ってくれるかな」

「ありがとう、ジャスティン！」

アメリカは喜びを顔いっぱい表しながら箱を開けると、「わあ」と声を上げた。

中には可愛らしく舌をちょっと出した狼のぬいぐるみが入っていた。

アメリカの手にちょうどいい大きさに、肌触りもジャスティンの獣化した時の毛に似ている。

「可愛い！ 私、大切にするね！」

「よかった。またしばらく会えないから、僕の代わりにしてくれるといいな」

「え……、また会えなくなるの？」

アメリカが心配になって上目遣いに見ると、ジャスティンは眉根を寄せて困った顔を

した。それでもアメリカを安心させるために、少し屈んで目の高さを合わせると優しく囁いた。

「アメリカが大きくなったら迎えに来るよ。それまでここで待っていて」

「大きくなったら？ 私が大人になるまで会えないってこと？」

「そんなことはないけど、これまでみたいに一緒にいるのはしばらく我慢だよ。でも、アメリカの準備ができたなら、……一緒に暮らそう」

「ジャスティンと、一緒に暮らせるの？」

「うん、今日はそのために帰ってきた。後で両親と一緒にアメリカのお父さんと話をするからね」

優しく笑ったジャスティンはボンボンとアメリカの頭を撫でた。

「ジャスティン、それなら目をつむっていて」

「ん、どうした？」

「いいから、目を閉じて」

「はいはい」

アメリカの言うままに目を閉じたジャスティンの頬に、柔らかい唇をそっと当てる。驚いたジャスティンは、ハッと目を開けると一気に顔を赤くしてアメリカの唇が触れ

た頬を手で押さえた。

「ジャスティン、約束ね。私、待っているから」

「アメリカ……、ああ、約束する」

ジャスティンは何かをぐっと耐える顔をしてアメリカを見つめた。

仲のいい二人が話しているのを邪魔する者は周囲にいない。

それを確認したジャスティンは、今度はアメリカに「そのまま」と言っ、額に触れるだけのキスをした。

「きゃっ」

「しっ、静かに！」

まさか、ジャスティンが額にキスをするとは思わず、アメリカは両手を頬に当てた。

「いつか……、ここに」

金色の瞳をまるでアメリカを狙う獣のように光らせて、ジャスティンは人差し指をアメリカの唇の上に置くと、そのまま首筋を沿わせ、鎖骨の上で止めてうなじを見る。

うなじを噛むのは、獣人が番と定めた証拠だ。

ジャスティンの番はアメリカだと言わんばかりの指と瞳の動きに、思わずぞくりとした何かが背筋を走る。

——番、それは獣人に備わった本能の伴侶だ。

番は生まれた時から定められているが、出会うことは稀な存在だ。ただ、出会うことができた獣人は決して番を離さないし、まるで物語のように求め合う。

ジャスティンの両親も番同士で、二人はいつも近くにいてとても仲がいい。（もしかして、私ってジャスティンの番なのかな。そうだと嬉しいけど）

ただの人間のアメリカにはわからない習性が獣人には多いが、それでも番の存在は特別だということは知っている。

ジャスティンの特別な存在になりたい。けれど、これまで誰からも『アメリカはジャスティンの番』だと聞いたことがない。ジャスティンからも言われたことがない。

たとえアメリカが番でなくても、番以外と普通に恋をして結婚する獣人もいるから、いつかジャスティンが自分を選んでくれると嬉しい——

一段と背の高くなったジャスティンを見上げ、アメリカは手をギュッと握りしめた。すると二人を見つめ、声をかけながら走り寄ってくる人がいる。

「おーい、ジャスティン！ 久しぶりだな、いつ帰ってきた？」

クリフォードがジャスティンを呼ぶ声が聞こえると、アメリカもハツとして兄のほうを向く。

「アメリカ、忘れちゃダメだよ」

「うん、ジャスティンもね」

にこりと笑ったジャスティンはすぐに兄のほうに顔を向け、手を振った。

「おーい、クリフォード！ 今行く！」

どこかふわふわとした期待を胸にしたアメリカは、まさかその日を境にジャスティンと会えなくなるとは思ってもいなかった。

誕生会の後、長い時間をかけてアメリカの両親とジャスティン、そして彼の両親たちは話し合いの場を持った。

アメリカはそわそわしていたが、話し合いが終わるとすぐにジャスティンたちは帰ってしまう。

ジャスティンとさようなら、と言葉を交わすこともできなかった。

両親に呼ばれたアメリカは、期待と不安が入り混じった気持ちで父の書斎の扉を開けた。

すると父が少し険しい顔をしているのを見て、アメリカは嫌な予感に胸が騒ぐ。

「アメリカ、今日はジャスティン君の両親が、お前と彼との婚約を申し込んできた」

「お父様！ 本当に？」

「だが……、お前はまだ十二歳だ。婚約するのに早すぎる訳ではないが、お父さんもお母さんもお前には自由に娘時代を過ごしてほしいと思っている」

「それって、どういうこと？」

「今すぐ、ジャスティン君と婚約することはない、ということだ」

「……っ、そんな！」

これまで二人が仲良く過ごすのを反対しなかったから、まさか父親が断るとは思わなかった。

同じ伯爵家同士で家格の問題もない。

ステイングレー伯爵家は兄のクリフォードが継ぐため、アメリカがジャスティンのところ^{とこ}に嫁ぐのに、何の支障もないと思っていたから尚更だった。

「お父様、私、でもジャスティンのこと……」

恋心を隠せないアメリカが思わず涙ぐんで父親を見ると、彼は困った顔をしている。

「アメリカ、お父さんはね、将来ジャスティン君と結婚することを反対している訳ではないよ。ただ、それを決めるのはもう少し先でもいいかな、と思ったただけだ。ジャスティン君も、騎士としての勉強があるから、しばらくはお前と会うこともできないだろ

う。まだお前たちは若い。少し距離を置いて、それでもお互いやっぱり結婚したいのであれば、その時は喜んで賛成するよ」

父親はアメリカをいつくしみ、頭を優しく撫でた。

「では、お父様。私っ、ジャスティンのこと好きでいてもいいの？」

「ああ、恋する気持ちを抑える必要はないが、とにかくアメリカ。お前が十八歳になるまでは、ジャスティン君と二人きりになつてはいけない。いいか、これだけは守りなさい」

「はい。お父様」

将来のことまで反対されていない、それだけでアメリカはホッとする。

ジャスティンが迎えに来るまで待つと約束したから、アメリカはずっと待つことを決心した。

もらった狼のぬいぐるみにジョイと名前をつけ、枕元に置いていつも話しながら眠るのがアメリカの日課となった。

ジャスティンに会えない代わりに手紙を書いたけど、なぜか返事がくることはなかった。

もしかしたら父親が婚約を断ったことに、腹を立てているのかもしれない。

居ても立っても居られず、兄のクリフォードに相談しても、ただ「待て」としか言わない。

それでも毎年誕生日になると、差出人のわからない色とりどりの豪華な花束が届く。かつてジャスティンがアメリカのために取ってきてくれた花束に似た色合いをしているから、この花束は彼からの贈り物だと信じることにした。

(きつと、何か事情があるんだろうな)

寂しく切ない気持ちになりながらも、アメリカは一途にジャスティンを想い続けた。しかし何の連絡もないまま三年も経つと、手紙すら迷惑かと思ひ書くのをやめる。

十六歳になって社交界デビューとなり、王宮で行われる夜会で久しぶりに見たジャスティンは、王太子殿下の後ろに控える精悍な騎士となっていた。

だが、久々に会ったその日もアメリカと言葉を交わすどころか、いくら見つめても視線が合うこともない。

もうあの時の約束なんてジャスティンは覚えていないのかもしれない。

まばゆい光の中にいる彼に、アメリカは声をかける勇氣を持っていなかった。

それでもアメリカは——彼を忘れることはできなかった。



「殿下！ 一体あれはなんですか！ いつ私が殿下の真実の愛の相手になったのですか！」

ジャスティンは猛烈に怒っていた。

王太子を相手に喧嘩を売るなんて、不敬でしかないが黙ってはいられない。

王太子と近衛騎士だが、普段から気安く話す間柄でもある。

ナサナエルが夜会でオルコット公爵令嬢に婚約破棄を告げることは知っていたが、真実の愛の相手として、まさか隣にいた自分を指名するとは思ってもしなかった。

「いや、本当にすまん。だが、俺の相手が女嫌い^{めい}で有名なお前なら真実味が出るだろう」「でしたら事前に言ってください。私にも覚悟が必要です」

「ジャスティン。事前に伝えたらお前は反対しただろう？ いや、お前を巻き込んでしまつて、本当に申し訳ないと思っているよ。しかし、脅迫してきた犯人たちの意図がまだ見えない今、私の恋人と表明すると狙われる可能性もあるが、騎士のお前を襲う奴もいないだろう。それにお前にはもう番がいるから、俺に懸想^{けそう}することも無いだろうし適任だと思っただんだ」

「……っ、殿下、それはそうでしょうが！」

「あれだけ派手にお前を恋人だと言った手前、もうお前しかいないんだ。頼む！ 今だ

けでもなんとか、こらえてもらえないか?」

「殿下! 頭を下げてください!」

ナサナエルとジャスティンは騎士学校で出会って以来、もう七年も一緒に過ごしている。

ジャスティンは近衛騎士に選ばれたのは、ナサナエルが気がねなく話せる相手であり、なおかつ護衛としても適任だったからだ。

騎士学校を卒業した後、ジャスティンは騎士としてナサナエルに忠誠を誓った。そのナサナエルの頼みを無下にすることはできない。

もちろん命令となれば文句など言える立場ではないが、ナサナエルもさすがに今回のことは強制したくないようだ。

頭では理解している。王太子は考えられる選択肢の中から、最善を選ぼうとしただけだ。わかっているけれど、今日はジャスティンにとって特別な日だった。

(やっと、アメリカと話ができたと思っただのに)

忘れもしない、アメリカの十二歳の誕生日。婚約を申し込んだが、スティングレー伯爵の回答は予想外のものだった。

アメリカが成人するまでは普通の令嬢と変わらず育てたい。

幼いうちに婚約者を決めることはしない、だから婚約は辞退すると伝えられた。けれどアメリカはジャスティンの番だ。

それは出会った時から確信している揺るがない事実だ。

アメリカを奪う男がいたら、喉ぼとけを噛みちぎってでもアメリカを取り戻す。

幼少時からのジャスティンの執着を見て、互いの両親は既にそのことをわかっていた。だが幼いアメリカはただの人間で、番を感じることができない。

ジャスティンはアメリカに番と告白することも、愛を囁くことも止められた。

さらに、成人するまで婚約できないどころか、接触することを禁じられた。

獸人にとって番は唯一であり己の半身だ。その執着は身を滅ぼすこともある。

もし幼いアメリカを蹂躪じゅうりつすることになれば、悲劇では収まらない。

多くの獸人は成人した後で己の番と出会うため、ジャスティンのようにまだ幼い頃に番に出会ってしまうケースは稀だった。

ジャスティンの親は、獸人として番への強い想いを知っている。

だから余計に、ジャスティンを厳しく戒いましめた。手紙を書くことすら禁止されるとは思いもしなかったが、毎年の誕生日に花を贈ることだけは見逃してくれた。

あの時以来、直接の接触はしなかったが、間接的には干渉してきた。

アメリカに声をかける男がいれば全て脅してでも排除してきた。クリフォードを通じてアメリカの様子を聞き、できることがあればなんでもしてきた。結局、十二歳のアメリカと交わした約束だけが、ジャスティンのこころの支えとなっている。

——大きくなったら、成人したら迎えに行く。それまで待っていてほしい……その想いに嘘はない。しかし約束を今夜果たそうとしたところで、思わぬ事態に巻き込まれてしまった。

ナサナエルにはアメリカが番であることを話しているが、今夜が再び会話することを許された日だったとは伝えていない。

今夜はアメリカ次第では、プロポーズをするつもりで服装を整え、指輪まで用意していた。

なのにナサナエルの真実の恋人に指名されてしまった。

もう状況を認めない訳にはいかない。

「わかりました、殿下。恋人のふりでもなんでもしますよ」

「そうか、ジャスティン！ 相応の報酬は払うからな！」

「殿下、それはいいですから……」

ジャスティンは自分の置かれた立場に、深いため息を吐いた。

そもそもことの起こりは、ナサナエルの婚約者のキャサリン・オルコット公爵令嬢が犯罪集団のマクゲランに脅されたことだ。

未来の王太子妃を狙う文言が並ぶ脅迫状が届き、実際に誘拐されなかったことも一度ではない。

警備を厚くしてもマクゲラン一味を捜し出すこともできず、目的も未だ掴めていない。豊かな黄金の髪に美しい紺碧こんぺきの瞳をしたキャサリン嬢を、ナサナエルはことのほか愛している。

公爵令嬢という地位にいながらも憤み深く、驕おごることのない人柄は人々に愛されている。

幼い頃から未来の王妃となるべく、教育を受けその期待に応えてきた。

未来の王太子妃、ひいては王妃となる人材はキャサリン嬢をおいてほかにない。

大切な彼女を守るためにナサナエルは、婚約破棄をする芝居することに決めた。

犯人の目的が「未来の王太子妃を殺す」ことならば、その地位を一時的になくせばいいからだ。

婚約破棄を犯人に知らせるため、今夜の新年を祝う舞踏会で派手に宣言することになつていた。

真実味を出すために、かわいそうだがキャサリンには何も知らされていない。あれほどショックを受けていた様子から察するに、キャサリンは自分とナサナエルが恋人関係であることを信じたのだろう。

キャサリンでさえそうならば、アメリアが誤解するのは目に見えている。

ジャスティンとナサナエルが二人で話していると、後方でがざりと木の陰に誰かが隠れる気配がした。

「誰かいるな、ジャスティン」

「はい、ただ、この匂いは……」

これはアメリアの匂いだ。

獣人のジャスティンが間違えることのない、唯一の番の匂い。

「殿下、アメリアです。ああ、アメリアと話をさせてください。このままでは、誤解されたままでは……」

「さて、俺もキャサリンに真実を伝えたいが脅迫犯の動きが見えない。悪いがしばらく待つてくれないか」

「そ、それはそうでしょうが、そうするとアメリアが……」

「ジャスティン、俺もキャサリンをあんなにも悲しませてしまった。お前にもすまないと思うが、ああつ、キャサリン！」

ナサナエルは恋しいキャサリンを思い出したのか、涙目になっている。

よく、苛烈なイメージを持たれるナサナエルだが、それは赤髪と鋭い眼がそうさせているだけで本当の彼は涙もろい。

情に厚く臣下想いなのに、少しヘタレで今回もやらかしてくれた。

そのヘタレがようやく想いを告げて、最近やつとキャサリンと両想いになれた。

それにもかかわらず相手を傷つけるとわかっているのに、彼女を守るために断腸の思いで婚約破棄を叫んだことは偉いと思う。

（だが、私を巻き込まないでほしかった……）

最愛のアメリアが近くにいて、それも今夜のドレスは胸の谷間がしっかりと見えていた。

本当なら今すぐ抱きしめて、その谷間に顔を埋めたい。

想像するだけでジャスティンの胸は高鳴るが、今はナサナエルの警護中だ。

気を引き締めてナサナエルを見ると、彼は目をこすりながらジャスティンに話しか

けた。

「ジャスティン、す、すまないが目にかゴミが入ったようだ」

「殿下……、では、見てみますのでこちらを見上げてください」

獣の目を持つジャスティンは、暗い夜でも大抵のものを認めることができる。

背後にいるアメリカに意識を向けつつも、ジャスティンはナサナエルの頬に手を添え、その目の中を覗き込もうと顔を近づけた。

「何もありませんよ、殿下」

「そうか？ 痛みを感じて……、ああ、また泣けてきた」

「それはゴミではなくて、キャサリン嬢を悲しませたからではありませんか？」

「そ、そうか、そうだな……、あんなにもショックを受けて、ううっ、キャサリン！」

「殿下、でしたら一刻も早くマクゲラン一味を捕まえて、こんな茶番は終わらせましょう」

「あ、ああ、そうだな」

キャサリンを思い出して、今にも泣き出しそうなナサナエルを宥めて^{なだ}いると、背後にあったアメリカの気配がスッと消えた。

もう夜会も終わったからアメリカは馬車乗り場へ向かったのだろう。

今夜話せなかったことは残念だが、脅迫犯を捕まえるまでのこと。

キャサリンは未来の王太子妃となる大切な方だから、多少の犠牲^{ぎせい}を払ってでも守らなければならない。今できることは、とにかくマクゲラン一味を見つけ出すことだ。

「殿下、こうなれば私も捜査隊に加えてください」

「わかった、今回の事件は陛下も心配している。人員を増やして指揮権は俺が持とう」

「そうしてください、マクゲラン一味を一刻も早くあぶり出します」

「すまないな、つい、お前を頼りにしてしまうよ」

ジャスティンはナサナエルからの信頼に応えるべく、決意も新たに拳をぐつと握った。ナサナエルと恋人関係だと公表したからには、それを利用して犯人を追いつめるしかない。

ナサナエルはヘタレだが、やる時はやる男だ。

特に戦いの場での指揮官としての有能さは折り紙付きだから、今回も彼が指揮するのであれば解決も早いだろう。

庭園を抜けて広間へ戻るナサナエルの後ろを歩いていく。

まさかその時の二人の様子が決定打となり、アメリカが盛大に勘違いをすることになるとは思いもしなかった。



「ねえジョイ。聞いて、今日はすごく悲しいことがあったの」

アメリカは自宅のベッドに寝そべると、狼のぬいぐるみのジョイを手に持ち、いつものように話しかけた。毎晩寝る前にジョイとおしゃべりするのが日課になっている。

照れ屋で引つ込み思案な性格のアメリカにとって、ジョイは大切な友人だ。

今日は普段以上に着飾って参加した舞踏会だったのに、誰とも話すことができなかった。

ジャステインの姿を見ることができたけど、彼の見たくない姿も見ってしまった。

ぬいぐるみのジョイに語りかけることで、まるでジャステインと会話している気持ちになれる。

立ち姿が凛^{りん}として男らしくなった彼の姿を思い返しては、アメリカはいつかまたジャステインが語りかけてくれるのを待っていた。

「でも、ジャステインは私のこと、忘れちゃったみたい」

兄はひたすら「待て」と言うけれど、どれだけ待っても彼は目も合わせてくれない。

それどころか今夜の舞踏会ではナサナエルに真実の愛の相手だと名指しされ、夜の庭園では二人でキスをしていた。

そう、キスを……

もう、これ以上何を信じて待てばいいのだろうか。

「ねえ、ジョイ……、ジョイとお話ができたらよかったのにね」

話すことができなくても、せめて本物の狼になってくれたらよかったのに。狼の毛を撫でながら、喋りかけることができたら嬉しいのに。

そんな魔法があったらよかったのに……

そんな、ものに命を吹き込む魔法、魔法……

「あ、あったかもしれない！」

アメリカは飛び上がると、部屋の本棚の中にある魔法辞典を取り出した。

セリーナ王国では能力があれば、魔力を秘めた魔石を使って魔法を使うことができる。生まれ持った才能が必要なため、使える者はそれほど多くないがアメリカはその能力を持っていた。

しかし、アメリカは何の訓練も受けていないので難しい魔法は使えない。

魔法使いと呼ばれるためには、それこそ何年にもわたり過酷な訓練を受けなければな

らない。

アメリカは苦勞してまで魔法使いになりたいとは思わなかった。

なぜなら小さな頃から、アメリカの夢はジャスティンのお嫁さんになることだったから。

とはいっても、魔法に全く興味がなかった訳ではない。

護身術代わりに姿を消す魔法を覚えたが、それもほんの短い時間だけだ。

急に消えて、急に現れると気味が悪く思われてしまうから、親には万一の場合以外は使つてはいけないと言われていた。

でも魔法を使えるのだから、もしかしたらジョイに命を吹き込む魔法もできるかもしれない。

「えーっと、どこだっけ」

魔法にもいろいろ種類がある。それらが記^しされているのが魔法辞典なる書物だった。

「あ、あった！」

そこには人形に命を吹き込むのは上級魔法だと書いてある。

アメリカは一番簡単な初級魔法でさえ習得するのに時間がかかった。これまで上級魔法を成功させたことはない。

「上級だけど、うん、やってみよう！」

辞典に書いてある説明では、命を吹き込む人形と魔法をかける人間の関係の深さによつて、難しさが決まるとある。

ジョイとはもう六年も一緒に過ごしている、アメリカにとって大切な友達、いやそれ以上の存在だから可能性はあるかもしれない。

「えーっと、月の光を浴びさせて、魔法陣を描くのかあ」

アメリカは魔法辞典を食い入るように読み始めた。

普段の就寝時間を過ぎても夢中になって読み進めていく。

何かに夢中になっていないと、ジャスティンのことを考え込んでしまいそうになる。アメリカは込み上げてくる涙をこらえ、休みなく本を読み続けた。

「また、アメリカは眠れていないのか？」

「お父様、そんなことはありません」

「だが、目の下にそんな隈^{くま}を作つて、朝食も全然食べていないではないか」

アメリカは眠れない目が続いていた。この頃は夜になると魔法辞典だけでなく、ありとあらゆる魔法の本を読み漁っている。

さすがに寝不足がたたり、昨日は刺繍をしながら針を指に刺してしまった。今朝も青白い顔をして、一目で睡眠不足とわかる腫れぼったい目をしょぼつかせている。

父親からも心配されるが本当のことを言うことができない。

ぬいぐるみを本物の狼にしたい、命を吹き込みたい。そんな魔法を実践したいと言えばきつと反対されてしまう。

とはいえ、ただでさえジャスティンとナサナエルがキスをしている場面が瞼の裏に残っていて、眠りに入ろうと思うと思い出してしまい、時には夢にまで出てきて苦しくなる。

結局、魔法辞典を読むことに没頭していなくても睡眠不足になっていただろう。

「お父様、大丈夫です」

そう答えながらも、アメリカは切ないため息を漏らした。

「父上、アメリカのことで話があります」

朝食が終わり、それぞれの部屋に戻る途中でクリフォードは父親に話しかけた。

「わかった、私の書斎で話そう」

二人は連れ立って書斎に入ると、重厚な扉に鍵をかけた。

「父上、ジャスティンとナサナエル殿下のことはお聞きになりましたか？」

「ああ、新年の舞踏会だったな。殿下がジャスティンを恋人だと宣言したと聞いたが」

「ええ、そうです。そして、あの後からです。アメリカの様子がおかしいのは」

クリフォードは浅く息を吐き、覚悟を決めて父親の顔を見上げた。

「父上、もうジャスティンを呼びましょう。アメリカと話をさせるべきです」

「だが、彼のほうからは何も言っていないのだろう？」

「ですが、何か理由があるはずですよ。アメリカがジャスティンの番であることは、父上もご存知ですよ」

「ああ、これはやはり覆せない事実だな」

「獣人である彼が番のアメリカを諦める訳がありません。アメリカが拒否したのであればともかく、アメリカもこの六年間、ずっとジャスティンを想い続けています」

「そのようだな」

父親のステイングレー伯爵は眉をひそめながら、思案するクリフォードを見た。

「クリフォード、お前はと思う？」

「そうですね、殿下の恋人という噂は何か事情があると思います。この六年間、ジャス

ティンは父上たちから言われたことを忠実すぎるほど守り、アメリカと話をするどころか、視線も合わせないほど徹底して避けていました。それでもアメリカを想い続けます。僕にはうるさいほど、アメリカのことを聞いてきましたから」

「そうか、お前は彼と連絡をとっていたのか」

「父上、ジャステインは本当によく耐えました。男の獣人が幼少期に番に会うと、女性の身体が成長する前に襲ってしまうことがあると危惧していましたが、ジャステインはアメリカに指一本触れていませんよ」

「う、うむ」

「僕に言わせると正直すぎるほど、約束をずっと守っています」

「うむ、そのようだな」

「もう、アメリカも成人したのですから、父上。いいかげん、二人を会わせてあげましょう」

「……っ、そうだな」

伯爵は押し黙ったまま、硬い表情を崩さずにソファアに腰かけた。

それを見たクリフォードも、向かい合う席に腰を下ろす。

二人は同時にため息を吐くと、どうすればアメリカが元気になるか、まずはそのことを話し合うことにした。

「クリフォード、確かアメリカは幼い頃、獣化したジャステインが傍にいと寝つきがよかったな」

「そうでしたね。一緒に昼寝する姿をよく見ましたよ」

「アメリカはもふもふした動物が好きだからな」

「父上、まずは寝かしつけるために、ということではジャステインを呼ぶのはどうですか?」

「そうか、その手があったか。だが、仮にも未婚の娘の部屋に彼を招くなど……」

「ジャステインには、獣化したままでいるように伝えますよ。さすがに彼も、狼のままではアメリカに何もしないでしょう」

「それが守ればいいが……」

「父上、もうアメリカも成人しました。何かあったらそれこそ彼に責任を取らせれば済む話です。ジャステインの両親にも伝えておけば、話は早いでしょう」

「それもそうか。……はあ、時が経つのは早いものだな」

「ええ、では僕から連絡するということで、よろしいですか?」

「ああ、クリフォード、ジャステインのほうはお前に任せよう。私はルーセル伯爵に連絡をとっておく」

父親の言葉に頷いたクリフォードは幾分か安心して立ち上がると、一刻も早く伝えよ